

Ricœur, Paul. 1992. *Oneself as Another*. Chicago: The University of Chicago Press.

Shabout, Nada. 2007. *Modern Arab Art: Formation of Arab Aesthetics*. Gainesville: University of Florida Press.

Taylor, Nora A. 2004. *Painters in Hanoi: An Ethnography of Vietnamese Art*. Honolulu: University of Hawaii Press.

(園中 曜子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Ahmed Bouyerdene, *Abd el-Kader: l'harmonie des contraires (préfacé par Éric Geoffroy)*, Paris: Éditions du Seuil, 2008, 227 p.

本書の紹介

本書が対象とする、アミール・アブドゥルカーディル・ジャザーイリー (al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Jazā’irī, 1807/8-83) は、19世紀アルジェリアにおけるフランス軍の侵略に対する抵抗運動 (1832-47) を指導し、その過程でアルジェリアの3分の2の領土を統一したことで知られる。1847年、彼はアレクサンドリアまたはパレスチナのアカへの移送の約束をフランス軍と取り交わして降伏した後、この約束に反して仏政府によって拘束された (1848-52)。他方ナポレオン3世による解放の後、亡命先のダマスカスで彼はイブン・アラビー学派のスーフィズムを採求し、その集大成である神秘主義の書、『諸階梯の書』¹⁾ を著すとともに、イスラーム改革主義者の育成者となった。現在ではアブドゥルカーディルについてアルジェリア・ナショナリスト [Madanī 1931; Yacine 1948; Boutaleb 1990] による、建国の父との位置づけが強固であるが、これまで軍事 [Berbrugger 1838; Daumas 1851]、スーフィズム [al-Murābiṭ 1966; Chodkiewicz 1982]、イスラーム改革主義の側面 [al-Jazā’irī 2002; Weismann 2006]、アラブ・ナショナリズム [King 1992] 等の側面から多くの伝記、研究書が出版されてきた。さらには彼についての表象は絵画、詩、小説等、非常に多岐に及んできた。その背景はこの人物のもつ多様な側面による複雑さにある。

歴史研究者、アフメド・ブーイエルデン (Ahmed Bouyerdene)²⁾ による本書、『アブドゥルカーディル——相反するものの調和』は、彼の生涯と思想について歴史記述と併せその精神的次元を対象とすることで包括的な記述かつ詳細な分析を試みる。スーフィズムの専門家であり多くの研究があるエリック・ジョフロワ (Éric Geoffroy)³⁾ は序文において、オリエンタリズムによって彼がイスラームやスーフィズムと無縁とされたことを問題視し、彼の一連の行動を、それらと関連付け、さらに自らの置かれた状況を受け入れた信念と精神性において理解する必要があると主張する [p. 10]。昨今として、彼のメッセージの持つ現代性 (l’actualité) についての敷衍的解釈は、アルジェリア

1) 『諸階梯の書』の初版は1911年カイロにおいてであり (al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Jazā’irī, *Kitāb al-Mawāqif fī al-Wa’z wa al-Irshād*, al-Qāhira: Maṭba‘a al-Shabāb, 1911)、1966年ダマスカスで再版された (al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Jazā’irī, *Kitāb al-Mawāqif fī al-Taṣawwuf wa al-Wa’z wa al-Irshād*, 3 vols, Dimashq: Dār al-Yaqza al-‘Arabiya lil-Ta’līf wa al-Tarjama wa al-Nashr, 1966)。研究書は以下を参照 (Jawād al-Murābiṭ, *al-Taṣawwuf wa al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Ḥasanī al-Jazā’irī*, Dimashq: Dār al-Yaqza, 1966; ‘Emir Abd el-Kader, *Écrits spirituels (Kitāb al-mawāqif)*, Michel Chodkiewicz (présenté, traduit et annoté), Paris: Éditions du Seuil, 1982; Abd al-Qādir al-Djazā’irī, *Le Livre des Haltes (Kitāb al-Mawāqif)*, Tome 1-3, Michel Lagarde (présenté, traduit et annoté), Leiden, Boston, Köln: Brill, 2000)。

2) 著者は『同時代人によるアブドゥルカーディル——肖像の断片』を既刊 (*Abd el-Kader par ses contemporains: fragments d’un portrait* (Préface du Cheikh Khaled Bentounès), Paris: Ibis Press, 2008)。

3) ジョフロワはスーフィズムとジハードについての著作がある (Éric Geoffroy, *Jihād et contemplation: vie et enseignement d’un soufi au temps des croisades, suivi de la traduction de l’Épître sur l’Unicité Divine de cheikh Arslān*, Beyrouth: les Éditions Albouraq, 2003)。

史再考の流れとも呼応し、彼の生涯・思想に関する多くの専門書の出版、シンポジウムや企画展の開催が行われてきた⁴⁾。アブドゥルカーディル生誕200年を記念する年に出版された本書もこのような現代の潮流にあり、彼を再考する動きはますます盛んになっているといえよう。以下、本書の各章の内容を要約する。

本書は1883年5月25日、ダマスカスでのアブドゥルカーディル死去の場面を描く、第1章「最後の息(L'ultime souffle)」から始まる。多くの人々が彼の葬儀に参列し、その訃報が多くの欧米の新聞によって報じられたことから彼は「かつて世界をその名で埋め尽くした人物」、つまり生前にすでに伝説が確立した歴史上の主要人物として読者に紹介される。同時に本書の導入部で概括される彼の生涯は、精神的次元と現世的次元において絶え間ない瞑想によって政治的行動を育んだ、抵抗運動を戦った兵士(guerrier)かつ聖者(saint)として提示される。

第2章「定着(L'enracinement)」では、アブドゥルカーディルの生い立ちにおける精神的要素と現世的要素との密接な関連が述べられる。まず、彼の家系における預言者の系譜(sharif)⁵⁾とカーディリー教団の系譜という、二重の系譜(double filiation)の重要性が述べられる。次に教団の修道場(ザーウィヤ, zāwiya)が、宗教的・神秘主義的教育とともに、精神的鍛錬と人格の完遂を目的とする礼儀作法の実践(al-ṣāliḥāt)を行っていたことが指摘される。3番目に著者は彼のマッカ巡礼(1827-29)をイスラームにおける義務行為のみならず、スーフイズムにおける入門の旅(voyage initiatique)を意味するものとしても解釈する。たとえば彼の身に着けた巡礼の白装束は神のもとへの帰還、すなわち自我(ego/nafs)の死、カアバ神殿の周回(al-tawāf)は自らの実在の消滅(al-fanā')である。同時に彼の旅の体験は、様々な人々との交流により、イスラームの地の現状認識とも両立していた⁶⁾。以上の点から彼の精神性は、彼を育んだ自然、文化、精神、人間性において現実世界と両立した形で形成されたものとして示される。

第3章「戦う聖者(Un saint combattant)」において、アブドゥルカーディルが1830年フランス軍のアルジェ占領に対する抵抗運動の信徒たちの長に選出されたことから、歴史に登場した彼の言説について述べられている。著者は、まず彼の名声の獲得が皮肉にも侵略戦争における敵側のフランスによる形成であり、ジハードの指導者としての使命と、スーフイー、すなわち「数珠の人(homme de chapelet)」の使命が根本的に対立するものである、という二重の矛盾を指摘する[p.48]。フランス軍は彼のイメージを、抵抗運動初期の軍部による「野心的」、「狂信的」という評価から、彼の優位を認める2度の和平協定にみられる政策の矛盾とあいまって高貴さ、指導力の高さ、聖性、カ

4) 彼についての企画展が2003-4年にフランスで複数回開催された。カタログには以下がある。

Abd el-Kader et l'Algérie au XIX^e siècle dans les collections du musée Condé à Chantilly, catalogue de l'exposition au Jeu de Paume du musée Condé à Chantilly du 22 février au 21 avril 2003 (prolongation jusqu'au 11 mai 2003), Paris: Somogy Éditions d'Art, 2003; *Un héros des deux rives: Abd el-Kader, l'homme et sa légende, catalogue de l'exposition à l'Hôtel de Soubise du 25 février au 23 juin 2003*, Paris: Centre Historique des Archives Nationales, 2003; *L'émir Abd el-Kader, un homme, un destin, un message, catalogue de l'exposition à l'Institut du Monde Arabe du 26 mai au 14 juin 2003*, Paris: Lemessage, 2003; *Abd el-Kader le Magnanime, études pour un portrait, catalogue de l'exposition de Jacques Paris, du 14 novembre 2003 au 15 février 2004*, Gap: Musée départemental, 2004; *L'Emir Abd el-Kader à Amboise, 1848-1852, catalogue d'exposition au Château Royal d'Amboise du 16 octobre 2004 au 14 novembre*, Amboise: Fondation Saint-Louis, 2004.

5) アラビア語転写表記は、『イスラーム辞典』(2002)に準ずる。

6) 旅程において彼が訪れた地名はスーフイズムと関連付けて提示される。例えば、アレクサンドリアは、スーフイーの精神的な停留所(halte)、シャーズイリー教団創始者の後継者ムルスイーの廟で特徴付けられ、タンターは守護聖者バグダウィーの廟を擁し、ダマスカスではシェイフ・アルスラーン、イブン・アラビーの廟を参詣、ナクシュバンディー教団へ入信し、バグダードではカーディリー教団創始者の廟を参詣した。この旅程については、彼の自伝の中で述べられている(al-Amīr 'Abd al-Qādir al-Jazā'irī, *L'émir Abdelkader: autobiographie écrite en prison (France) en 1849 et publiée pour la première fois*, H. Benmansour (tr.), Paris: Dialogues édition, 1995, pp.56-59, 68-69)。

リスマ性で特徴付けられる、ほぼ崇拜対象ともいえるイメージに変化させた。さらにこれらの言説は、彼の小ジハード (al-jihād al-ṣaġhīr) への関与を、内的な態度の表明、精神的な次元での大ジハード (al-jihād al-akbar) であると示唆するものでもある。

第4章「解放の禁欲 (Une ascèse libératrice)」では1847年の彼の敗北、フランスでの拘留における、彼の苦悩とそれを克服する宗教実践にみられる彼の精神的次元の深化について述べられている。彼は政治的役割の放棄、政治的な死 (la mort du politique) を表明した後、自らがアルジェリア征服の道具と化すことを危惧し、拘留への抗議として断食を継続し、外出を拒否した。著者は彼のこの態度をスーフィズムの思想の実践としての禁欲 (zuhd)、精神的な隠遁 (khalwa) と位置づける。彼の禁欲は1852年10月16日、将来のフランス皇帝となる、ルイ・ナポレオンがアンボワーズ城を訪問し、解放を宣言するまで続けられた。第5章「事実に耐えられる倫理 (Une éthique à l'épreuve des faits)」では、フランス人捕虜虐殺 (1846) を彼が執行したとの嫌疑による彼の苦悩と、文明化の使命 (mission civilisatrice) の名の下でアルジェリアにおける残虐行為を正当化したフランスの態度について述べられる。アブドゥルカーデイルの態度は捕虜の扱いに丁重であり異なる宗教を尊重しており、彼の嫌疑は冤罪であるといえる。これこそがフランス軍に欠けていた倫理であった。その後彼が移住したダマスカスでは、1839年ギュルハネ勅令の発布によるムスリムの特権喪失の不满から、1860年にムスリム暴徒によるキリスト教徒への大規模な暴行事件が勃発した。彼はムスリムを諫めるとともに12,000名ものキリスト教徒を救済した。その偉業は欧米各国から賞賛され宗教の本質に達したとする評価もある一方、彼の名声を利用しようとする政治的戦略もみられた⁷⁾。著者はこの行動について、列強の中東介入を阻止するための彼の政治的配慮であったとする一方で、その動機はスーフィーとしての彼の内面的探求、神の命令への服従によるものと位置づける。

第6章「時の人 (Un homme de son temps)」においては、異文化との接触の中で培われた彼の思考の柔軟性が、熟考の重視、既存の意見への盲従を非難するイジュティハードの実践 [p. 139] として示される。まず抗仏ジハードにおいて世界最強の軍隊、フランス軍の技術力と組織工学を採り入れた点において、彼の稀有な実用主義が明らかである。その後フランスでの虜囚と滞在において、様々な訪問客と対話し、肖像画のモデルやカメラの被写体となり、オペラ鑑賞、社交界のサロン、3度の万国博覧会に出席するなど、彼の異文化受容、西欧の科学技術に対する好奇心が明らかになる。とりわけ1869年に工事が終了した紅海と地中海をつなぐスエズ運河——形而上学的に2つの世界または2つの現実の媒体 (isthme des isthmes/barzakh al-barāzikh) としての意味を含む⁸⁾——に対して彼は公共の福祉に役立つ科学技術に対する感銘を抱き、工事責任者レセップスとも交流した。このような彼の態度は、科学技術を媒介とした東洋と西洋の理想的な関係を示すものであり、宗教の原則から逸脱することなく信仰と実践を培った適応 (adaptation) の例として示される。彼はその著作の1つ、『知性ある人への喚起 (Rappel à l'intelligent)』⁹⁾において、科学的知識と信仰の両方が創造主である神を讃えることを目的とし、それらが両立することを主張する。同時に彼の態度は、近代化を非宗教化の過程と定義する19世紀西欧と、全ての革新を異端 (bid'a) とし信仰が硬

7) Charles-Robert Ageron, "Abd el-Kader souverain d'un royaume arabe d'Orient", *Revue de l'Occident musulman et de la Méditerranée* 8(1), 1970, pp. 15-30.

8) スエズ運河建設におけるスーフィズムの含意の指摘は Étienne (1994) にみられる (Bruno Étienne, *Abdelkader Isthme des isthmes/ barzakh al-barazikh*, Paris: Hachette, 1994)。

9) *Dhikrā al-'Āqil wa Tanbīh al-Ghāfil/ Le livre d'Abd-el-Kader intitulé: Rappel à l'intelligent, avis à l'indifférent: considérations philosophiques, religieuses, historiques*, Gustave Dugat (tr.), Paris: B. Duprat, 1858.

直化したものとして示されるイスラーム世界、これら双方に対する問題を喚起するものとして示される。

第7章「達成 (L'accomplissement)」において、知的側面と体験的側面における彼の円熟の境地について述べられる。まず、イブン・アラビーの大著『マッカ啓示』に対する彼の注釈は、彼の高度な学識と精神的段階を示すものであり、この著作によって彼は近代における最高のイブン・アラビー解釈者の一人とみなされている¹⁰⁾。次に1863年に行ったマッカでの修行・巡礼における筆舌に尽くしがたい恍惚、直観の神秘体験は、詩や形而上学的解釈の書『諸階梯の書 (Kitāb al-Mawāqif)』において述べられるものとされる [p.165]¹¹⁾。マッカでの修行以前にすでに神を識る者 (ārif) であったアブドゥルカーディルは、修行における自我の消滅、臨終にも近い苦しみの体験を通じて『諸階梯の書』のテーマとなる存在論を醸成し、至高の段階である神の唯一性 (tawhīd) を自らのうちに実現したのであると述べられる [p.191]。

第8章「統一の人 (L'homme de l'unité)」においては、彼の宗教間対話 (エキュメニズム) の側面が述べられる。彼は抗仏戦争時の諸部族の統合、キリスト教司祭との対話、マッカ巡礼後のフリーメーソンへの加入により異なる要素の統合を試みたことから、啓典の民に共通の手本となるアブラハム的人物として位置づけられる。創造者である神が被造物の中に属性として現れ、それぞれの属性は被造物においてそれと正反対の属性によってのみ存在し、それら相反する属性の相互作用が生命の脈動を生み出す。預言者ムハンマドはこうした反対物の調和の体現者であり、神の代理人の後継者である完全人間 (insān kāmil) の原型とされる。アブドゥルカーディルはムハンマドの継承者 (wārith muḥammadī) であり、同時に完全人間と位置づけられるのである。

結論「アブドゥルカーディルの遺産 (Le legs d'Abd el-Kader)」において著者は、自らをアブドゥルカーディルの精神的、知的、政治的、人間的遺産の後継者とする後世の言説が、彼の態度の変遷と折衷主義 (éclectisme) を無視し、彼の人格を唯一つの側面へと還元することによって、偏った人物描写をしがちであるという問題点を喚起する。彼の一生が他に類を見ないものであったことは確かであるにせよ、英雄、聖者としてのみの表象は、彼を接触不可能な「非人間化 (déshumanisant)」に至らしめる。むしろ著者は、人間としての生における試練を各瞬間での絶え間ない努力によって昇華させる術によってこそ、彼は英雄であると位置づける。本書は彼を戦争の敗北という挫折、アンボワーズでの同伴者の死を通じた苦悩やその克服を描写することを通じ、一人の人間像として描き出す。その描像は近現代アルジェリアにおける国家のシンボルとしての神格化、一枚岩的理解に対する批判を含意している¹²⁾。

本書の評価すべき点は資料解釈の斬新さである。そのことを3つの側面から述べてみたい。第1に、アブドゥルカーディルを現在の国際協調、相互理解の枠組みの中で東洋と西洋、イスラームとキリスト教の対話の象徴として位置づけている点である。注目すべきは、彼と彼についての証言者

10) 彼は『マッカ啓示』のカイロ版 (*al-Futūḥāt al-Makkīya*, al-Qāhira, 1852[1274]) を、弟子に写本と校合せ、校正点を指摘させた。

11) 詩集 *Émir Abd el-Kader, L'Algérien, Poèmes métaphysiques*, Charles-André Gilis (présenté, traduit et annoté), Paris: Les Editions de l'Œuvre, 1983 として刊行されている。

12) 著者は以下のように本書を締めくくっている。「彼 [アブドゥルカーディル] が早くも 1832 年秋に道標を建て、ようやく 130 年後に日の目を見た、彼のアルジェリアにおける主権国の計画に対して疑いの反応があったように、調和した人間性における彼の信念は現実化に至らないのであろうか。アブドゥルカーディル・アル・ハサニーは明らかに新しい時代を予告しているのである [p.227]。」

たちとの間の双方向的な相互理解を描いていることである。本書で彼は、オリエンタリズムが提起するような一方的な叙述の客体としてではなく、彼自身の他者理解、異文化理解の視点によって他者を認識する主体として提示されている。

第2に、様々な証言に彩られる彼の生涯を精神的次元の視点から捉え直すという点が挙げられる。例を挙げると彼の拘留時の言説から明らかにされる、彼の異文化に対する拒絶から受容という意識の変容は、フランス側に対する妥協的態度の現れとしてのみならず、主体的な意義をもつものと位置づけられる。さらに彼の思想的次元を史実に基づいた現実レベルで解釈することで、彼の思想と行動について包括的な理解を可能とする。「美的である以前に、精神と現世、優雅と厳格、行動と熟考、近代性と伝統、これらのすぐれた調和は、スーフィーであるアブドゥルカーデイルの内的な現実を反映している [p. 220]」といった具合に、彼の表象は複雑な精神的次元の具現化として理解される。

第3に、アブドゥルカーデイルの思想・行動を現代にも通じるものと解釈する視点である。著者は彼がフランス社会に適応し同時に思想を深めていった事例を指摘し、ムスリム女性のヴェールの着用を絶対視していなかったことを採り上げる。この点は政教分離を説くフランス国内でのムスリムの問題を示唆する多分に現代的な解釈といえる。

このようにアブドゥルカーデイルと他者との相互の視点の導入、彼の精神的次元についての叙述、現代性を汲み取っている点において高く評価できる本書であるが、なお問題としよう点があるように思われる。それらを3点に分けて指摘する。

第1にアブドゥルカーデイルがイジュティハードの実践者であるとの著者の主張は、自らの熟考の努力によりイスラームを形骸化させなかった理想像として提示され、多くの事例によって裏付けられるかもしれない。しかし実際に彼がイジュティハードを主張していたのかどうかについては疑問が残る¹³⁾。したがって、第6章で述べられるアブドゥルカーデイルと伝統的ウラマーの意見の相克は、イジュティハードをめぐる問題としてではなく、伝統墨守に対する立場の相違として理解されるべきであろう。

第2に、本書でテーマとされた彼の精神性が議論の余地のない崇高さをもって述べられていることが、批判の余地をなくしている点が挙げられる。彼自身の評価を過度に肯定的なものとするのは、別の意味で一面的な像を創出しているのではないかと懸念が抱かれる。

第3に、彼がナショナリズムのなかで国家の象徴とされていく過程について言及が薄いという点である。アブドゥルカーデイルの降伏後、多くの抵抗運動がフランスによって鎮圧され、結果的にアルジェリアはフランスの植民地となった。彼についての言説・表象はこのようなアルジェリア・ナショナリズムの文脈において捉えられることが通例であるが、本書はこうした点についての言及を避け、ほぼ19世紀西欧の資料をもとに構成されている。原著者は本書においてアブドゥルカーデイルを、異なる要素を自らの努力によって調和させる理想的な人間像として描いている。彼の精神性の評価を通じて描かれる西欧とイスラームの間の開かれた関係は、現代の要請に沿ったものであろう。しかし本書の記述が19世紀西欧の言説の域を出ないまま、アルジェリアとフランスの歴史認識の相違、フランスにおける移民の問題等現状の問題を無視し、彼の現代における理想的な位置づけに一足飛びに向かっている点は、理想化された過去を可能性に満ちた未来に結びつけることに過ぎない。

13) 『諸階梯の書』第121階梯においてアブドゥルカーデイルは、法源学におけるすべてのムジュタヒドは害悪であり、不信仰と結びつき、精神世界(‘aqliyat)の中にあり権威をもたないとして、イジュティハードの実践に対して否定的である(Jazā'irī 1966, pp. 264-265)。Commins (1988)も彼がイジュティハードを推進していたとの見方に消極的である(David Commins, “Abd al-Qādir al-Jazā'irī and Islamic Reform”, *The Muslim World* 78 (2), 1988, pp. 121-131)。

引用文献

- Ageron, Charles-Robert, “Abd el-Kader souverain d'un royaume arabe d'Orient,” *Revue de l'Occident musulman et de la Méditerranée* 8(1), 1970, pp. 15–30.
- Berbrugger, Louis-Adrien, “Voyage au camp d'Abd-el-Kader, à Hamzah et aux montagnes de Wannourhah (province de Constantine), en décembre 1837 et janvier 1838,” *Revue des deux mondes* 15, 1838, pp. 437–471.
- Boutaleb, Abdelkader, *L'Emir Abd el-Kader et la formation de la nation algérienne: de l'émir Abd el-Kader à la guerre de libération*, Alger: Éditions Dahlab, 1990.
- Bouyerdene, Ahmed, *Abd el-Kader par ses contemporains: fragments d'un portrait* (Préface du Cheikh Khaled Bentounès), Paris: Éditions Ibis Press, 2008.
- Commins, David, “‘Abd al-Qādir al-Jazā'irī and Islamic Reform,” *The Muslim World* 78(2), 1988, pp. 121–131.
- Daumas, Eugène, *Les chevaux du Sahara*, Paris: Chamerot, 1851.
- Étienne, Bruno, *Abdelkader: Isthme des isthmes/ barzakh al-barazikh*, Paris: Hachette, 1994
- Jazā'irī, al-Amīr 'Abd al-Qādir al-, *Kitāb al-Mawāqif fī al-Taṣawwuf wa al-Wa'z wa al-Irshād*, 3 vols, Dimashq: Dār al-Yaqza al-'Arabīya lil-Ta'līf wa al-Tarjama wa al-Nashr, 1966.
- (Émir Abd el-Kader), *Écrits spirituels (Kitāb al-mawāqif)*, Michel Chodkiewicz (présenté, traduit et annoté), Paris: Éditions du Seuil, 1982.
- (Émir Abd el-Kader, L'Algérien), *Poèmes métaphysiques*, Charles-André Gilis (présenté, traduit et annoté), Paris: Editions de l'Œuvre, 1983.
- , *L'émir Abdelkader: autobiographie écrite en prison (France) en 1849 et publiée pour la première fois*, H. Benmansour (tr.), Paris: Dialogues Éditions, 1995.
- , *Le Livre des Haltes (Kitāb al-Mawāqif)*, Tome 1-3, Michel Lagarde (présenté, traduit et annoté), Leiden, Boston, Köln: Brill, 2000.
- Jazā'irī, Badī'a al-Ḥasanī al-, *Wa mā Baddalū Tabdīlan (“Would Never Change”): Tafāṣīl Daqīqa 'an Jihād al-Amīr 'Abd al-Qādir al-Jazā'irī wa Dawlatih wa-Hijratih (Assistance of MAM: Municipal Administration Modernisation and Financed by EU, Related to Restoration of Amīr's Palace at Dummar in Damascus)*, al-Ṭab'a 2, Dimashq: Dār al-Fikr, 2002.
- King, John, “Abd el-Kader and Arab Nationalism,” in J.P. Spagnolo (ed.), *Problems of the Modern Middle East in Historical Perspective*, London: Ithaca Press, 1992, pp. 133–149.
- Madanī, Aḥmad Tawfīq al-, *Kitāb al-Jazā'ir: Tārīkh al-Jazā'ir ilā Yawminā hādhā wa Jughrāfiyatihā al-Ṭabī'īya wa al-Siyāsīya*, al-Jazā'ir: al-Maṭba'a al-'Arabīya, 1931.
- Murābit, Jawād al-, *al-Taṣawwuf wa al-Amīr 'Abd al-Qādir al-Ḥasanī al-Jazā'irī*, Dimashq: Dār al-Yaqza, 1966.
- Rāsī, Jūrj al-, *al-Dīn wa al-Dawla fī al-Jazā'ir: min al-Amīr 'Abd al-Qādir ...ilā 'Abd al-Qādir*, al-Jazā'ir: Dār al-Qaṣba lil-Nashr, 2008.
- Yacine, Kateb, *Abd el-Kader et l'indépendance algérienne*, Algiers: Al-Nahdha, 1948.
- Weismann, Itzhak, *Taste in Modernity: Sufism, Salafīyya, and Arabism in Late Ottoman Damascus*, Leiden, Boston, Köln: Brill, 2006.

(柄掘 木綿子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)